

公開講演会（文学部主催・社会文化科学研究科共催）

「フランスから見た現代日本—村上春樹『海辺のカフカ』を通して」

日時：2008年2月28日 14:00-16:00

場所：岡山大学文学部会議室

講演題目：「フランスから見た現代日本—村上春樹『海辺のカフカ』を通して」

講演者：クリスチヌ・レヴィ（ミシェル・ド・モンテーニュ＝ボルドー第3大学・日本
学術振興会外国人招聘）

参加者：31名

講演要旨

講演者のレヴィ氏は、ボルドー第3大学で教鞭をとりながら、同時にパリ第7大学のGREJA（日本に関する社会科学・人文科学研究グループ）に所属し、明治期以降の近代日本政治思想、特に自由民権運動とフェミニズム運動の進展について、戦争など大きな社会的イベントや、家族のあり方の変化などと関連付けながら、研究を行っている。

また「女性の創造性・想像力」に関する研究グループと、「明治期の言説」に関する研究グループにも参加し、前者では瀬戸内寂聴、平塚らいてうを通して「羞恥心」というテーマで、また後者では「明治期の家族像」というテーマで研究を進めている。

講演はフランス語で行われたが、事前にフランス語原稿が送付され、赤松頌也氏（岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程）により、その日本語訳と登場人物とあらすじ紹介が準備され、当日配布された。このようにして、フランス語を解さない聴衆への配慮が図られた。

講演は、村上春樹の『海辺のカフカ』を通して、現代日本の文化と社会を考察し、その過程で、村上が世界各国で成功を収めている理由についても検討するというものであった。

まず、この小説においてしばしば言及される「森」、「夢」、「想像力」の果たす役割について、戦争への考察と関連させ、また罪と責任は、何によって、そしてどこから生じるかという問題とからめて検討された。

次に、『海辺のカフカ』における過去の古典作品の参照を通して、この作品の恋愛小説としての側面が検討された。そして、主人公の一人（15歳の少年）のありかたが、オイディプス王と光源氏の間にあるという見方が提示された。

続いて、村上作品が、日本近隣の東アジア諸国を含めた海外においてどのように受け取られているか検討し、その海外での人気の秘密に対して、いくつかの仮説が提案された。

最後に、この作品のもう一人の主人公（初老の男性）と脇役たちの交流を検討し、この作品で、作者は大衆文化と「高尚な」文化との区別を取り払おうとしているのではないか、という見方が提示された。

講演後、多くの学外からの聴講者も交え、活発な質疑応答が行われた。特に、本学部の寺岡教授から、ドイツと日本の戦後処理のあり方の違いを指摘した上で、『海辺のカフカ』に示された戦争観においては、「責任」の引き受け方に甘さがみられるのではないか、という趣旨の指摘があり、白熱した討議が行われた。

続いて、文学部演習室において、ボルドー第3大学への留学の説明会も開催された。